



宮崎県立日南振徳商業高等学校

平成22年9月10日（金）

校長室だより 22号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【来週の行事】 9月14日（火）振徳祭体育の部 結団式
16日（木）就職選考会開始

- 1 「校名あれこれ」 第4代校長 三雲 汎 20周年記念誌より抜粋
- 2 出逢ったいい話 「人間のプロになれ」 『致知』2008年8月号より抜粋

「校名あれこれ」（原文） 第4代校長 三 雲 汎

日南振徳商業高等学校も成人式を迎えたことになるわけで、まことにめでたい限りであります。

私は昭和43年4月に県教育委員会に勤務することになりましたが、確か5月に教育長に呼ばれまして、県南地区の商業高校設置について検討するよう命ぜられました。それから1年近く資料を作り、原案を練って、何回もヒヤリングを重ね、設置が決まり、45年4月開校を目指して工事が進められました。44年9月の県議会文教委員会に新設校の名称を教育長が報告するために、校名を何とするかが問題となり、全国の商業高等学校名簿を繰ったり、また日南市の郷土史家飯田医師を数回訪れて、郷土の歴史や地誌等の話や資料を提供していただき、校名選定の参考にする機会を与えられたことは大変有り難かった。ある時は、小高い山を切り開いた学校建設現場に立って、西方に連なる山々を眺めたり、足下を流れる広渡川や酒谷川の水音に耳を澄ましながらか校名を考えたこともありました。

校名は普通地域の名称を冠してつけたものが多いのですが、当時私立の「日南商業高等学校」がありましたので、どうしても別なものにしなければなりませんでした。そこで郷土史の上から考えられるのは、何と言っても「振徳」という文字でした。次に歴史と地誌の面からは「嶺南」でした。徳川三代（家康・秀忠・家光）の崇敬も受け、江戸の芝東禅寺の開基となった、飲肥出身の嶺南和尚の名にあやかると同時に、校庭から西北に連なる山々の南にある学園というふうにも考えられました。その他、広渡川のほとりになる「広渡」、飢肥城の東なる「城東」なども浮かんできました。更に、当時、商業高校の多様化のあらわれの一つとして、「日南ビジネス」も名を連ね、五つの校名案を以上の順に伺いを立てました。最終的には「日南振徳商業高等学校」の名が陽の目を見ることになり、私も安堵の胸を撫で下した次第でありました。

私は日南振徳商業高等学校には人一倍深い愛情がありました。一度は是非この学校に勤務したいと思っておりました。図らずも、県立高等学校勤務最後の3年間を、大変気持ちよく、楽しく過ごさせていただき、私の夢が実現したことを心から感謝しております。短い間ではありましたが、思い出は沢山、この身に、この心に深く刻み込まれているようです。生徒の礼儀正しさ、学習活動、部活動など、由緒ある学校名が、名実共にますます発展していくことを心から期待しています。

出逢ったいい話 『人間のプロになれ』

プロゴルファー 杉原輝雄さんのお話です。

■前立腺がんの告知

医師から「前立腺がん」の宣告を受けたのは、11年前のことになる。プロゴルファーとして40年目を迎えた年だった。すぐにも手術が必要だと言われたが、休めば一から体づくりをしなければならない。60歳を迎えていた私にそんな時間はなかった。手術を拒否して投薬治療をすることに決め、食事健康食に切り替えた。さらに、短時間の運動で大きな効果が得られる加圧トレーニングを開始し、この体でやれるところまでやってやろうと決めた。投薬をしながらではあるが、71歳の

いまもおかげさまで現役を続けている。国内では通算54勝の戦績を収め、気がつけば永久シード権を持つ現役最年長のプロゴルファーになっていた。

一昨年には、つるやゴルフオーブントーナメントの予選を通過し、結果的にそれは米国のサム・スニード選手が残したレギュラーツアーでの世界最年長記録を上回るものとなった。決して満足な結果を残せているわけではないが、試合に出る以上は目標を持ち、どこまでもそれに挑戦していきたいと感じている。

私がゴルフを始めたのは小学校5年の時、キャディーのアルバイトをしたことがきっかけだった。そのバイトは中学校に上がってからも続け、土曜の午後と日曜になると、たいていゴルフ場へ足を運んだ。卒業する頃にはプロになればいいなと思ったが、いまのように養成所があるわけではない。ゴルフ場で選手の近くにいるのが一番勉強になるだろうと思い、洗濯係などもしながらプロになる道を探っていた。私のことを「練習の虫」と言う人がよくいるが、20歳でプロテストに合格してから、練習量はまるで足りなかったと思う。ただ、私は試合で負けた人たちすべてを、自分のライバルだと考えていた。またゴルフ界に限らず、世の中で活躍している人であれば、誰もがワンサイド・ライバル——つまり、こちらで勝手にライバルだと決めて、決して負けないつもりで生きてきた。

■人間の使命

ゴルフにおける勝者は一つの試合にたった一人しかいない。だからこそ、無数の負けとどう向き合うか、また悲観的な状況にあっても、決して腐らず一所懸命に取り組むことが大切になってくるのである。そのことを私に教えてくれたのは、オーストラリアのグラハム・マーシュという選手だった。彼はもともとゴルフが下手で、しばらくして日本ツアーに参戦できるようになったものの、プレーの運び方が非常に鈍く、他の選手やギャラリーたちをいつも苛々させていた。

約30年前に名古屋で開催された中日クラウンズで彼と一緒に回った時、初日、二日目とも成績は振るわず、彼も私も予選落ちは確定と言える状態だった。しかしマーシュは懸命だった。18番ホールのグリーン上で、入ろうが入るまいが大した意味のないパーパットを沈めようと、彼は入念に芝目を読んでいたのである。一方、勝ち目のない試合だと踏んでいた私は、彼のプレーを苛立ちながら眺めていた。しかし、そのパーパットを着実に沈めたマーシュは、翌週ぐんぐんと調子を上げ、予選を通過するどころか、見事優勝を決めてしまったのである。その日の調子が良かろうが悪かろうが、目の前にある一打一打を一所懸命に打たなければいけない、常にベストを尽くさなければいけないと教わった出来事だった。

ゴルフは努力をしさえすればいい結果が得られるものではないが、どんな時でも一所懸命に取り組んでいないと、よい結果には繋がりにくい。その時その時において常にベストを求められるのは、人生においても全く同じではないだろうか。

思えば小学校の頃からゴルフの世界に携わらせていただき、いろいろな方にお世話になった。昔はいまのように試合数が多くなく、出場したくてもできなかったことがたくさんあった。いまの若いプロゴルファーの多くは、小さな頃から自分のクラブを与えられ、試合に出られることも、練習をさせてもらえることも当然のように思っている。

もっとも、私自身も気がつくのが遅かったが、誰のおかげでゴルフをしていられるのかと考えた時、私は試合後にお世話になったスポンサーやコースの支配人宛に礼状を出すことにした。40歳を過ぎた頃だったのだろうか。私は人は皆、生まれた時から“人間のプロ”になるという使命を担っているのではないかと考えている。

人間であれば心があるのだから、挨拶もするし、相手への思いやりも当然持つことだろう。何も特別なことは必要なく、当たり前のことを当たり前にできるようになれば、その人は人間として立派なプロなのだ。ゴルフに限らず、その世界の上位クラスで活躍をする人は一流の素質か、それに近いものを持っている。しかし人間として一流でなければ、その人の値打ちは半分以下になってしまう。

人間のプロ——。病気や年齢の壁に立ち向かい、自らに挑み続けることもその条件の一つであると思う。